MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．６．７　発行元
第 580 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

２月から３月にかけて出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。３月後半から４月にかけては新刊のペースが落ちた気がする。年初めの一山を越えて一息といった時期なのだろうか。

能登半島地震のその後

４月に入り、台湾でも大きな地震が起きた。地震の「活動期」が続いているということだろう。活動期の最後の区切りにやってくるのが東海、西南海、南海トラフの地震なので、油断はできない。

能登半島地震によって形作られた災害・地形の現場を遺そうとする提案もなされるようになった。それは大切ことだと思う。ただ、長い年月を考えると、自然の中の断層・褶曲などを保存するのは難しい。私が５０年前に地質調査で歩いた時にフレッシュな状態だった崖の露頭も、Google マップの画像で見ると完全な森に姿を変えている。屋根をかけたり建物に納めてしまえば可能かもしれないけれども維持していくにはお金がかかり過ぎる。

「復興」と同時に「保存」というか「伝承」というか未来に伝えることを考える時、全体の構想をしっかり作る必要がある。あまり時間をかけないで…。東日本大震災の時もそうだが、５０年先１００年先の地域をどれほど考えただろうか…。

麻見和史『追憶の彼女』

３月に角川文庫から出た本。『警視庁文書捜査官シリーズ』の１０冊目になる。今回は文書解読班の矢代朋彦が個人的に捜査を続けていた七年前の事件が題材となる。幼馴染の水原弘子が不審者を追いかける中で急な階段から転落して死亡した事件。未解決のままになっていたもの。

矢代がフリーマーケットに出品されていた古いカメラを買ったところ、中に未現像のフィルムに２通の脅迫状のようなものが写されていた。その文面が現在起きている連続殺人事件に結び付いていて…。文書解読班の鳴海理沙主任は被害者が遺したダイイングメッセージの分析にも取り組む。七年前の犯人を見つけ出せるのか…。

澤村御影『准教授・高槻彰良の推察10』

３月に角川文庫から出た本。シリーズ１２冊目。（間にＥＸが２冊入っている）　副題は『帰る家は何処に』である。なかなか高槻准教授と深町君の抱えている過去の問題が進展しない。第一章の『ミナシの家』まではそんな流れ。第二章の『消えた少年』に入って雰囲気が変化し、いよいよ一歩踏み出した雰囲気が伝わってくる。相原塔矢という都内の高校二年生が行方不明になり、その後丹沢の山中の土の中から遺体が発見される。その背中の皮膚が広範囲に剥がされていた…。この事件は高槻准教授の子どもの頃に起きた事件と非常に似通っている。そして深町君の「嘘を見分ける耳」の能力が重大な役目を発揮するようになり、糸口らしきものが見え始める。すぐに解決には結び付かないが、結末に近づきつつある。

今野敏『夏空　東京湾臨海署安積班』

３月に角川春樹事務所からから出た本。『安積班シリーズ』の２０冊目になるのだろうか。雑誌『ランティエ』に連載された十編を集めた短編集。臨海署・安積班の活躍を描く。班長の安積警部補を中心にして須田、村雨などのメンバーが安心して読める捜査を展開する。第一話の『目線』は隅田川の河口付近に浮かんだ死体の事件。水上警備艇「かわせみ」で移動することで、東京の街並みを新たな視点で見るのがポイント。事件の本質も、人間関係も別の視点で見れば…合点が行くことも多いという話につながっていく。シリーズ当初は対立することの多かった相楽班との協力体制も万全に…。

伊吹亜門『帝国妖人伝』

２月に小学館から出た本。『ＳＴＯＲＹ　ＢＯＸ』に連載したものに書き下しを加えた連作短編集。『帝国妖人伝』という題名を見ると「怪奇もの」と思ってしまうが、中身は伊吹亜門らしい本格謎解きの歴史ミステリ。明治時代に小説家兼雑誌記者のような仕事をしていた那珂川二坊という人物が主人公になっている。時間の流れの中で、彼が旅先で出会う不可思議な事件が五つ。そしてその現場に立ち会うのが「妖人」というわけだ。

第一話の『長くなだらかな坂』と第二話の『法螺吹峠の殺人』は謎の作りが今一。論理もややわかりにくい。第三話の『攻撃！』から面白くなる。第一次大戦後のドイツ。那珂川はポツダムに取材に出掛ける。現地の屋敷に移り住んでいた朽木中将（将軍）がハラキリをしたような形で発見された。雪の降った朝で、将軍の足跡だけが残された小屋の中で出来事。現場の俯瞰図が示されており…。密室に近い状態。第四話の『春帆飯店事件』は終戦直前の上海が舞台。これもまたよく出来ている。